

「奥行きを感じる」のアーカイブ

2020 年度活動報告

2012 年よりテーマ演習を通じて「奥行きを感じる」の研究を、学生と課題を共に考え制作するというスタンスで継続してきた。2016 年度からは、新たに科研に採択され、海外研修や外部講師を招き、より幅と深さのある研究が可能となった。本年度はその科研の最終年度ということもあり、今までの研究をまとめた展覧会をギャラリー@KCUA にて 12 月に行う予定だった。ところが、その準備をしている時期に COVID-19 の発生があり開催の見通しが怪しくなり、やむなく 4 月に展覧会の中止を決定した。その代わりに 8 年間におよぶ作品をできるだけ漏らさないでアーカイブデータを芸資研資料として残すことにした。数えると 8 年間で 47 課題を立案し 952 点の作品数で、撮影は写真だけで 5600 枚を超えた。今後利用可能なアーカイブを作るためには、その撮影方法や系統立てた保存形式を考える必要があり、石原友明教授や佐藤知久教授には撮影の具体的な技術指導や方向性についての貴重な助言を頂いた。また事務局からは鬼頭謙氏の心温まる作業の申し出もあり、この場を借りて感謝をしたい。この作業は COVID-19 により学生の協力は頼れず、前述の人々と、我々教員メンバーだけで行うことになった。全作品を整理して撮影が終わったのは作業の開始から約 40 日が経過していた。撮影後の作品写真の番号付けや系統立てた研究データ整理の煩雑な仕事は平田万葉氏（彫刻専攻非常勤講師）にお願いした。併せて感謝したい。

我々が行ってきた奥行きの研究は、ラスコーの洞窟壁画、マチスの切り絵、長谷川等伯の水墨画、ジャコメッティの彫刻、縄文式土器、果ては日本庭園など、世界のあらゆる地域、あらゆる時代、あらゆるジャンルにまたがる芸術作品を横一列に並べて、各作品を等しく比較できる準拠枠をつくることであった。我々人類には脳の中に「奥行き」に反応する特別な部位があるらしく、この普遍的に共通する感覚の手掛かりから、各時代の様式や文化圏の違いから判断されてきた作品評価の枠を超えて、一段と広がりや深さを持った人類史的な造形美術史の位置付けをするという大胆な構想であった。これまでの研究の蓄積を明らかにするため 9 名の科研研究員のそれぞれの論考に加えて、授業で招いた 3 名の講師の寄稿も集め書籍としてまとめることになった。さらに 47 の課題の中から 9 課題を本の中に紹介することになった。この本が手掛かりになって、美術制作に対する興味が深まり、新しい視点で美術史が眺められるようになることが我々全員の願いである。

ちなみに私ごとではあるが、2020 年の 3 月をもって大学での任期が終わり、この 1 年は芸資研での客員研究員として過ごさせていただいた。この奥行きの研究は、私にとって彫刻空間とは如何なるものかを言語化し考察する研究でもあり、実に楽しい思索と実験の時間ともなった。このありがたい時間を頂いたことを感謝し結びの言葉としたい。

中ハシクシゲ（美術学部教授）